

2021 年度地質標本館における博物館実習

中村 由美¹⁾・森田 澄人¹⁾・兼子 尚知^{1) 2)}・利光 誠一³⁾

1. はじめに

2021 年 11 月下旬から 12 月上旬にかけて、地質標本館において博物館実習を実施しました。当初の計画では、2021 年 8 月下旬から 9 月上旬を予定していましたが、昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)拡大の影響を受けて、一度延期となりました。最終的には、6 大学から 10 名の実習生を迎え、博物館実習を無事に終えることができました。本稿では、2021 年度の博物館実習の様子をご紹介します。

2. 実習の内容

2021 年度の博物館実習は、実習生を 5 名ずつ前半日程(11 月下旬)と後半日程(12 月中旬)の 2 班に分け、各班とも 5 日間実施しました。

【実習 1 日目】

実習初日は、オリエンテーションとして地質標本館の概要や役割の説明をし、館内案内を行いました(写真 1)。また、収蔵庫の見学案内では地質標本館のみならず、地質調

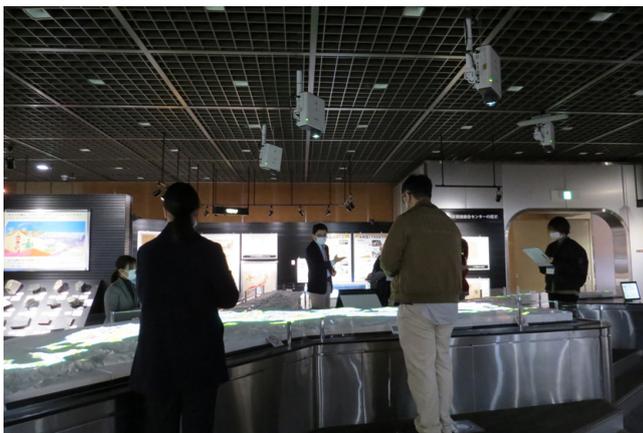


写真 1 実習 1 日目に実施した館内見学(写真は第 1 展示室のプロジェクションマッピング)。

査総合センターが管理をしている施設の見学を行いました。特にボーリング試料の収蔵庫では、幾多にも並べられたコア箱の風景が印象に残った実習生も多かったようです(写真 2)。

【実習 2 日目】

2 日目は、展示標本清掃と課題作成を行いました。資料の取り扱い技能は学芸員の最重要スキルのひとつで、展示標本清掃はその向上にとっても適した作業です。

展示標本清掃は第 4 展示室で行いました。ここには館内に展示されている約 2,000 点の標本の約半数の 1,000 点あまりが展示されています。2021 年度は岩石と鉱物標本を中心に清掃を行いました。中でも鉱物標本は取り扱いが難しいものが多く、特に慎重かつ丁寧に作業しなければなりません。そのため、三人一組になり役割分担をし、作業を行いました。標本を初めて取り扱う実習生が多く、標本をケース内から取り出すところからとても緊張している様子が見受けられました(写真 3)。

課題作成は実習生一人ひとりに課されるもので、実習の最終日には展示解説として発表を行います。本実習での課題は、館内の展示物を一つ選びその展示物の解説を作成す



写真 2 実習 1 日目に実施したボーリングコア収蔵庫見学(7-9 棟)。

1) 産総研 地質調査総合センター地質情報基盤センター
2) 産総研 地質調査総合センター地質情報研究部門
3) 産総研 地質調査総合センター連携推進室

キーワード：地質標本館、博物館実習、学芸員、展示解説、展示標本清掃、岩石薄片、体験型学習

る「一点解説」です。実習生の専攻分野は様々ですから、展示物の選択から大いに悩んでいる実習生も少なくありませんでした。

【実習 3 日目】

3 日目は、普及活動実習として体験型学習イベントである化石レプリカ作りやそれに関連したグループワーク、岩石薄片製作室見学等を行いました。

化石レプリカ作りはいくつかの作成方法がありますが、本実習では化石標本からあらかじめ作製しておいたシリコンゴム製の型に、石膏を流し込む方法(利光ほか, 2000)で行いました。まずはそれぞれの実習生が実際に化石レプリカを作成し、作成手順を学びます。今回は、アンモナイトとデスモスチルスの歯の化石レプリカを作成しました(写真 4)。作成手順はシンプルですが、細かい注意点があ

少々苦戦している実習生も見受けられました。その後、今度はイベントを実施するスタッフとして職員をお客様に見立て、模擬イベントを実施しました(写真 5)。最初は戸惑いながらの進行でしたが、同グループの実習生同士で協力し補いながら進めていく様子が見られました。

グループワークは、前半日程と後半日程で内容を変え実施しました。グループワークの良いところは皆で意見を述べながら実践してみることです。

前半日程では、デスモスチルスの全身骨格レプリカを使用し、骨並べ(それぞれの骨の位置関係を復元しながら並べる作業)を行いました(写真 6)。並べ方の見本として、2007 年開催の特別展「デスモスチルス歌登標本 世界一の全身化石発見から 30 年」の冊子(兼子, 2007)内に掲載の写真を参考にしながら、まずは骨格の中心となる背骨を探し出し、全員で並べました。骨の形や向き等をじっくり



写真 3 実習 2 日目に実施した展示標本清掃作業(第 4 展示室)。左: 標本を展示ケースから取り出すところ。右: 取り出した標本を作業台に乗せて清掃。



写真 4 実習 3 日目に実施した化石レプリカ作り実習。シリコンゴムの型に石膏を流し込むところ。



写真 5 実習 3 日目に実施した模擬イベント。標本館スタッフをお客様に見立ててレプリカ作りを指導。



写真6 実習3日目に実施した骨並べ実習。デスモチルスの全身骨格レプリカを使用し、それぞれの骨の位置関係を復元しながら並べる作業を行った。



写真7 実習3日目に実施した化石クリーニング作業。岩石をハンマーで割っているところ。

とよく観察することで、この後の骨を並べる際の気づきを得た実習生も多かったようです。その後、背骨を中心として左右それぞれの半身を担当するグループに分かれ作業を行いました。脊椎動物化石を専門とする実習生から、骨について詳しい見解を聞くこともできました。

一方後半日程では、化石クリーニングを行いました。一人一人にアンモナイト化石を豊富に含む北海道産ノジュールを配布し、まずは岩石を割るところから始めました。とても固いノジュールと慣れないハンマーに苦戦を強いられましたが、実習生はハンマーを片手に力強く作業をしていました(写真7)。ノジュールから出てきた化石は、小型のタガネを使用し化石をなるべく傷つけないように慎重にクリーニングを行います。化石が岩石の中にどのように入っているか想像しながらの作業は、予想以上に難しく職員と相談しながら進めていました。最後に、取り出したアンモナイトの鑑定を行い、ラベルを作成して完了です。

岩石薄片製作室の見学では、岩石薄片の作製技術について学んだ後、館内に移動し岩石薄片の展示について説明を受けました。展示を見ながら、研究を支える技術を一般の方はどう伝えるかなどを考える機会となったようです。

【実習4日目】

4日目は、展示標本清掃と課題作成を行いました。標本清掃は実習2日目の作業の続きからで、多くの実習生が標本の取り扱いに随分と慣れた様子でした。また、清掃のみならず標本の見せ方や置き方等、展示方法にも気が配れるようになっていました。個々の標本の特徴を引き立てる展示の工夫は、学芸員の腕の見せ所です。時には、取り出した標本について職員が説明をする場面もあり、標本そのものについても学ぶことが出来たようです。

課題作成は終盤となり、まとめに入る実習生が多くなりました。一方で展示物の選択にまだ迷っている実習生もあり、頭を抱えているようでした。

【実習5日目】

最終日5日目は、課題の仕上げと発表会を行いました。発表会は、実習生がそれぞれ選択した展示物の前で行いました(写真8)。緊張感が漂う中、実習生の専攻分野を活かした内容の発表がなされました。思いもよらない様々な方向からの解説は、実習生のみならず職員にとっても新鮮なものでした。しかしながら、展示物を中心とした解説内容にまとめるのは容易ではなかったようです。発表後に行った講評の際には、職員からのアドバイスとして「展示物をよく見ること」が挙げられました。展示資料は博物館活動における柱ともいえます。どのような形や色でどのような表情をしているのかをよく観察し、しっかりと伝えなくてはなりません。発表を終えた実習生は、安堵と共に反省点や新たな気づきを得たようです。

3. おわりに

2021年度の博物館実習も新型コロナウイルス感染症の影響を受け、一度は実施が危ぶまれる状況となりました。しかしながら、感染対策を講じた上で対面での実習を実施することができました。来館者との直接対応は実施を見送りましたが、体験型学習や模擬イベント等を通し運営側の視点を持つことで、学芸員という職業のイメージをより具現化できたのではないのでしょうか。今後、この実習での経験が学芸員の資格取得のみならず、社会に出た際に役立つ場面があれば幸いです。



写真8 実習5日目に実施した課題発表会。左：第2展示室。右：第1展示室。

謝辞：博物館実習においては、地質標本館委託保守受付の皆様、地質情報基盤センター地質標本館室試料調製グループ・運営グループの皆様、同センターアーカイブ室の吉川敏之氏(現・地質情報基盤センター長)・柳澤教雄氏・角井朝昭氏にご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

文 献

兼子尚知(2007) デスモスチルス歌登標本 世界の全身化石発見から30年。地質調査総合センター研究資料集, no. 465, 産総研地質調査総合センター。

利光誠一・坂野靖行・柳沢幸夫(2000) 体験コーナー ―化石レプリカをつくろう―。地質ニュース, no. 546, 29-30。

NAKAMURA Yumi, MORITA Sumito, KANEKO Naotomo and TOSHIMITSU Seichi(2022) Curatorial practice at the Geological Museum, GSJ, AIST in 2021FY.

(受付：2022年5月13日)